

# 文京川柳会 4月句会

2010・4・21 文京区民センター

4月句会は、「イメージ吟」の作句ポイントについて。最近のメデイア川柳等でもフォト川柳というジャンルが定着してきたが、イメージ吟は古く、図形や写真の視覚イメージ、音楽や自然の音などの聴覚イメージ、その他、臭覚、味覚、触覚などを契機に句を作る。

コツは、単にイメージを説明するのではなく、そのイメージから得られる心理、喜怒哀楽、社会世相などを盛り込む。

イメージ吟「||||」 尾藤 一泉 選

無人街 シャッターだけが風に揺れ つぼみ  
 弱いほど観閲式は派手になる 三川  
 潰しても見えた戦後史国の「ウソ」 牛歩

\* 人の死に残った記号 謎を呼び 文泉  
 モノリスという設計図無い形 枇杷子  
 古希過ぎて思考回路も途切れがち あさじ  
 道の駅私のバスはどこだっけ ふくよ  
 活断層 日本国中地震の巢 昭 邑

\* 似ているねセンター試験ナンバーズ 枇杷子  
 六義園 しだれ桜に夜の雨 幻 舟  
 自信作 ここもここもとなおされる 和佐美  
 箸だけが六人家族 行儀よさ ふくよ  
 「核」を積み列なす空母沖に見え 牛歩  
 学び舎の昔なつかしヤブレ窓 幻 舟  
 映画観た涙の跡に美容液 つぼみ  
 折り詰めめきちんと並ぶみやげ菓子 ちよ  
 飲みおごり指輪も花も俺をふる？ 秀  
 あこがれの団地もいまやケアハウス 三川  
 肩うづく 昨日かまれた跡残る 文泉  
 ケンケンパ 母の呼ぶ声若かった 晏 ね  
 ストライプ映った鏡イケてみえ 和佐美  
 正解は誰が動くかマツチぼう ふくよ  
 期待して百足の足並み何時狂う 晏 ね

\* 今回のイメージ吟では、コトバの課題よりも作句における想像力の飛躍が大きく、ずっと面白い作品が並んだ。句会を行う場合、課題によって大きく句の面白さが変わるので、出題にたいする主催者の心配りの重要性を感じた。選外の句も含めて、実に生き活きとした句が多かった。



つぼみさんの「無人街」、三川さんの「弱いほど」は見事に図形のイメージに現代社会を投影。イメージ吟の手本のような作品。

牛歩さんの「潰しても」は世代ならではの着想でイメージが活かされた。文泉さんの「死」との結びつけは深く、あさじさん、ふくよさん、昭邑さんの作品は、軽くイメージを捉えユーモアに纏める。以下、ここに並べた作品の着想は、イメージからの飛躍がそれぞれ面白く、「難しかった」とか「たいへんだった」というわのと派別に好作品に恵まれた。文字の課題の場合も同様に発想の翼を広げて作句すると良いだろう。(一泉)



互選互評「耕す」( 数字は得票 印は一泉)

耕地から荒地に還る過疎の村 三川

社会問題を意識した作品で共感多い。やや、耕地 荒地が言語遊戯的。

鍬と鋤誰も知らない使い道 枇杷子

同様に現代社会の一面を描く。近い将来、ホントウにこんな世界になるだろう。

春つらら 耕す川柳実がならず 文泉

春つららの取り合わせに妙味。仲間内では共感するところが大きい。

ターン 鍬を起こせず腰痛め 和佐美

やや帰納的なコトバの連鎖。中七以下「腰に逆らう鍬を持つ」くらいがいい。

一尺の箱で耕すへボキュウリ 幻舟

もっとも「耕す」姿勢の小さい作品。課題消化の発想として面白い。

不況下でベランダ菜園 花盛り つぼみ

「で」がやや説明的。「不況下のベランダ茄子に豆スイカ」のようにイメージで

伝来の美田を守る玉の汗 あさじ

きれいに纏まりすぎた感あり。「守る」の説明から「に光る」とするとイメージ。

ビギナーは耕すばかり球はそこ 昭邑

ゴルフコースを耕すという珍発想。「ビギナーの」

見かけより魂磨き得る女 秀

中八は避ける(添削)。他の作者と違った魂を耕すという発想に手柄。

耕してみみずびっくり踊りだす ちよ

無難にまろまった一句。自分もビックリというイメージを加えると捻りになる。

鍬鋤を知らぬ孫ども父祖の地ぞ ぶくよ

「まも」「ぞ」と強い句調は、孫に対する思い。やや押し付けになった。

以下残念ながら無票

農村の少子化ささえる耕運機 雅子

中八が共感を阻害した?。「農村の少子化耕運機がささえ」でよかった。

希望込め耕と名付けてみただのです 晏ね

発想は独創的だったが、共感する人なし。「希望込め耕と名付けて鍬知らず」

豊穣は耕す汗が産む恵み 牛歩

五世川柳好みの「教句」になってしまった。

特別課題「東京スカイツリー・イメージ吟」(抄)

たけのこの伸びより速きツリーの背 つぼみ

伸びる塔 モスラの糸も届くまい 文泉

見てるだけ 足が竦んだ恐怖症 あさじ

伸びながら三角野郎まるくなる あさじ

願わくばバベルの塔にならぬよう 三川

スカイツリー 超Eーよ 秀

見通しの立たぬツリーも日本も わさ美

\*こわりの句をもって、5月の「大江戸せん柳展」に参加させていただきます。

文京川柳会始まって以来の高得点をいただきましたのは、三川さんでした。荒地を「コウチ」と読ませ、「還る」の字を使ったことで、ファンを増やしたよつでした。二位の「鍬と鋤」の句も同様に、社会状況を捉えた作品。私は、講座で初めて、すきやきが鋤で農作業の合間に肉を焼いて食べたことが由来だったと知りました。

情景が目浮かび、共感をしやすい句が多かったように思います。そのなかで、昭邑さんのゴルフ、秀さんの魂磨きの句は、異彩を放っていました。

先生からは「五・七・五」の中には動詞はひとつ、またはなくてもよい、というアドバイスを頂きました。これからの作句のポイントとして留意しようと思います。

互評をしてメンバーの意見や経験を共有することは、たいへん貴重で価値のあるものだと思っています。気づかされることが多く、楽しみな時間です。( つぼみ )

シビックセンターからの眺望

